バイバイ、愚かで愛しい、僕の姉さん。

志崎 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バイバイ、愚かで愛しい、僕の姉さん。

【Ｎコード】
Ｎ７２１５Ｐ

【作者名】
志崎　遥

【あらすじ】
他の何を捨ててもかなわない。
君を守りたかった。
ただ、それしか頭になかったんだ。

（前書き）

「守りたかったのは、〜」と対になってます。

君のことが嫌いだった。
君はいつも僕を困らせるから。
でも泣いていたのは、いつも君のほうだった。
だから僕が困らなくなればそれでお終いさ。

僕の身長の二倍くらいある、大きな窓。見下ろせば、豆粒ほどの建物が不規則に並んでいる。――よかった。これで、長い長い階段を上ってきたかいがあったや。

「ここから飛び降りたら、どうなると思う？」

決して大きな声を出したわけじゃないけど、静かすぎるくらい静かなこの空間では、音がよく聞こえるみたいだね。後ろで、息を呑むのが分かった。同時に、こっちに向かって走ってるのかな、足音が響いてる。そんなに焦っちゃ、危ないよ。ただでさえ、ここの床は滑りやすいんだから。それ以上傷を増やしてどうするのさ。

君は必死に、何か喚いている。

だけど、ねえ、振り向かないよ。振り向いたら、戻ってしまうから。

戻れないよ。僕は、君と違って弱いから。

「答えはね、……教えてあげないよ」

ちょっとくらい、意地悪したっていいじゃないか？　僕は散々君に振りまわされてきたんだから。

風が痛いくらいに僕の身体を打ちつける。

このくらいが、旅立ちには丁度いい。

怖くは、ない。あいつらと向き合った時のほうが、余程怖かった。

うん、大丈夫。じゃあ、いってきます。

身体が傾く。最後に、君の手がこちらに向かって伸びているのが見えた。……ばかだな、届くわけないじゃないか。

ごめんね。

口を動かしてはみたけど、ちゃんと聞こえたかどうかはもう、確認しようがなかった。

君のことが嫌いだった。
それ以上に、役に立たない自分自身が一番大嫌いだった。

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7215p/

バイバイ、愚かで愛しい、僕の姉さん。

2010年12月31日06時54分発行